

ヨナタン・メイル Jonatan Meir 氏特別研究会 2015

2015年9月14-18日、イスラエルのベンギリオン大学よりヨナタン・メイル准教授を招聘し、東京大学にて四日間の研究会を開催した。メイル氏は近代ユダヤ思想史、なかでも東欧におけるユダヤ思想を専門としている。主な著作としては、18世紀後半以降の東欧におけるハシディズムをめぐる論争に関連する文献の校訂版 Joseph Perl, *Sefer Megale Temirin (Revealer of Secrets)* (2013), *Reshit Hokhmah: An Unknown Anti-Hasidic Manuscript* (2011), *Words of the Righteous: An Anti-Hasidic Satire by Joseph Perl and Isaac Baer Levinsohn* (2004), *Rabbi Nahman of Bratslav: World Weariness and Longing for the Messiah, Two Essays by Hillel Zeitlin* (2006)、および研究書 *Imagined Hasidism: The Anti-Hasidic Writings of Joseph Perl* (2003), *Michael Levi Rodkinson and Hasidism* (2012), *Rehovot ha-Nahar: Kabbalah and Exotericism in Jerusalem* (2011) などがある。



14-16日 セミナー「論争の年代記：ハシディーム、ミトナグディーム、そして現代ユダヤ教正統派の始まり」

14-16日には、3-5限の時間帯（13:00-18:30）でヘブライ語の文献講読のセミナーをおこなった。セミナーのテーマは1772年に始まった東欧でのハシディズム論争から、現代のユダヤ教正統派が形成されていく過程をたどることである。正統派の「起源」についてはさまざまな学説があるが、メイル氏によれば、それは18世紀末の東欧におけるハシディームと彼らへの批判者たち（ミトナグディーム）の論争に見出せる。これまで、ハシディズムは反正統的な運動として安易に位置づけられがちであったが（M・ブーバー）、そのような理解を見直し、ハシディズムとその反対者の双方が後の正統派に通じるユダヤ教の姿を示したことを論証するねらいがある。

初日は伝統的なトーラー学習を厳格に守るリトアニアの反ハシディズム運動をとりあげた。運動の中心にいたのはヴィルナのガオン（1720-1797）である。ヴィルナのガオンはハシディズムがトーラー学習およびその担い手である賢者たちを中心とするアシュケナジの伝統を転覆させるとし、破門というきわめて厳しい態度で臨んだ。それは、ハシディズムをシャブタイ派運動と同一視し、対話の余地のない異端そのものであるという評価を下したことを意味する。しかし、ガオンの活動していた時期にはまだハシディズムの神学的な著

作は存在せず、彼の批判のほとんどは伝聞にもとづいていた。さらに、ガオンはハシディームとの対話を拒んでおり、当時のハシディズムの思想や実践を正確に知ることはなかった。結局のところ、論争初期の反ハシディズムの言説は必ずしも現実を反映したものではなく、むしろレトリックによってハシディームの「異端的な」実践を描き出すことを目的としていたのである。そこには、ユダヤ人共同体内の権威をめぐる政治的な闘争があった。この論争が神学的な主題をめぐるものへと移行するのはガオンの死後のことであり、一方的な破門という措置も回避されるようになっていくのであった。

二日目はこうしたミトナグディームの反対運動に対するハシディーム側の反応をとりあげた。ハシディズムはハツェル（指導者の住居および庭）での説教やツァディーク（義人）による祝福といった活動を中心とするものであり、その担い手たちにはそれが革新的な運動であるという自覚があった。とはいえ、大半の民衆はツァディークに日々の生活における祝福を求めたのであり、彼らはハシディズムを神学ではなく社会的実践において受け入れていた。一方、宗教的エリートはヴィルナのガオンたちからの批判に応答するかたちでハシディズムの神学を構築することを試みた。そして、それは弁明的な立場にとどまらず、よりラディカルなトーンを帯びることもあった。初期の神学構築において重要な役割を担ったのはメジリッチの R・ドヴ・ベール (c.1700–1772) であった。ドヴ・ベールはハシディズムの開祖に位置づけられるイスラエル・バアル・シェム・トーヴ (1700–1760) から遺言を受け取ったというかたちで、トーラーの学習よりも祈りの重要性を説いた。その祈りとは霊魂が身体から離れて神の一部になること、すなわち神との合一（ドゥヴェクト）のために自らの死をも覚悟するという強烈なものであり、ヴィルナのガオンが恐れたのもこのようなハシディズムのエリートが目指す宗教的実践の革新であった。多くの場合、こうした神学および実践は小冊子あるいはパンフレットの形態で、ごく一部の者たちによって共有された。そのなかには極端な主張によって、伝統的な体制に鋭く対立しようとするものもあった。ヴィルナのガオンが至高の価値を置くトーラー学習は「トーラー・リシュマー」すなわち、トーラーの学習そのものを目的とする学習であった。しかし、過激なハシディームはそのような従来の学習ではドゥヴェクトを実現できないと批判した。彼らにとって、トーラーとは神とつながる神秘体験を得るための扉であり、学習によってテキストの意味を明らかにするという伝統的な理念は根本から否定されるべきであった。他方、そうしたエリート主義の極端な傾向を批判し、没我的な祈りやトーラー学習ではなく、別の側面を強調する立場も現れた。論争の早期解決を目指す彼らの中心にいたのがリアディの R・シュネウル・ザルマン (1745–1812) であった。シュネウル・ザルマンはツァディークについて、神秘家としてよりも教育者としての役割を期待した。そして、パレスチナに渡ったツァディークとは別に、自らを「第二のツァディーク」として位置づけ、祝福を与えることも奇跡も起こすことはないが、教師として民衆を導くことを志した。彼はヴィルナのガオンとの対話を試みるなど、ハシディズムを説明することに努め、ハシディームのみならずすべてのユダヤ人を守ることを自覚していた。論争の激化がロシア政府の介入を誘発したことを受け、シュネウ

ル・ザルマンはハシディズムがユダヤ教そのものであり、ユダヤ人民衆の教化を目指すものだと強調することによって、論争の鎮静化に成功した。彼にとって、ハシディズムとは革新ではなく復興だったのである。

最終日の三日目はヴォロジンの R・ハイム（1749–1821）の主著『ネフェシュ・ハ・ハイム』をとりあげた。1797年のヴィルナのガオンの死後、リトアニアのユダヤ人社会の指導者となったのが R・ハイムであった。彼はハシディームとの直接的な論争ではなく、教育および神学によってトーラー学習の意義をあらためて示そうとした。1802年、R・ハイムはイェシヴァを創設し、子供の頃から学習を通じてトーラーへの敬意を高める教育課程を確立した。そして、大衆向けの倫理・道徳的な著作『ネフェシュ・ハ・ハイム』を著した。同書はリトアニア・ユダヤ教の伝統的な倫理観と、イツハク・ルリアにその起源を持つカバラー的な倫理観の統合を目指すものであった。おこなうべき実践をハラハーというかたちで命じるのではなく、説教によって道徳的な振る舞いの重要性をわかりやすく説明することで、大衆の教化に努めたのである。『ネフェシュ・ハ・ハイム』は四つの「門」で構成され、損なわれた神の世界を人間の宗教的実践が「修復」（ティクーン）するというテウルギー的な理論、その「修復」のみを目的とする祈りのあり方、「修復」によって世界が原初の状態に戻ることに、最後にトーラー学習の理念である「トーラー・リシュマー」の正しい意味が語られる。セミナーではそのトーラー学習に関する箇所を集中的に読み、祈りと同様に「修復」のみを目的とする学習の理念を確認した。さらに、『ネフェシュ・ハ・ハイム』では、トーラーを読むことで神秘体験を得て、神との合一（ドゥヴェクト）にいたることを目的に掲げるハシディズムの実践が批判され、それは「トーラー・リシュマー」の理念に反するとされた。しかし、R・ハイムはこの批判によってハシディズムを排除しようとはしなかった。むしろ、「トーラー・リシュマー」ではないトーラー学習の実践も、やがては正しいトーラー学習に到達するための一段階であると評価したのである。『ネフェシュ・ハ・ハイム』では、ハシディズムに対する批判がさまざまな箇所で暗に示されているが、R・ハイムはヴィルナのガオンのようにそれを異端と断罪するのではなく、理想的なトーラー学習や祈りへいたる過程としてすくい取ったのである。

ハシディームとミトナグディームによる論争は、結果として、それぞれの仕方で現代のユダヤ教正統派の原型を作り上げた。シュネウル・ザルマンを開祖とするハバッドは、現在では世界中に拠点を作り、伝統的なトーラー学習を保持する正統的なユダヤ教の集団であることを自負している。他方、ヴォロジンの R・ハイムが提示したトーラー学習の理念もまた、ルリアのカバラーの用語を散りばめつつ、きわめて伝統的かつ保守的な立場を表明するものであった。興味深いのは、18世紀におけるユダヤ教の革新的な運動として出現したハシディズムと、それに反対する双方の陣営から、つまり論争そのものから、伝統的なユダヤ教の保守と復興を掲げる現代ユダヤ教の主流が形成されたということである。

三日間のセミナーでは注意深い精読を必要とするテキスト（イスラエル人の学生ですら音読や理解が難しい）を、メイール氏の丁寧な解説とともに時間をかけて読み進めた。「起

源」をめぐる議論に求められる慎重さや、ハシディズム内部の多様性、東欧ユダヤ人社会のヘブライ語・イディッシュ語・アラム語といった多言語的な状況、そして少しずつ変化していく論争の過程など、いくつもの興味深いトピックについてのメーデル氏の鋭い考察を聞くことができた。また、セミナーは原則としてヘブライ語でおこなわれ、参加者の習熟度もまちまちであったが、全体としてフレンドリーな雰囲気が進められたこともあいまって、参加者の側からの質問も数多く挙げられた。東欧のユダヤ教世界を伝える当時のテキストを実際に読み、議論をまじえていく三日間のセミナーは非常に濃密で、有意義な時間であった。メーデル氏を含むすべての参加者が心地よい疲れを味わえたものと確信している。

18日 講演「ユダヤ啓蒙主義とエソテリシズム：新たな視座」

近代ユダヤ史の通説において、ハスカラー（「ユダヤ啓蒙主義」と訳される）は西欧近代的な啓蒙主義運動と歩を共にするものと位置づけられているが、今回の講演においては実際に自らをマスキリーム（啓蒙主義者）と名乗っていた人々の言説を用いて実際のハスカラーの思想の側面をご紹介いただき、近代ユダヤ思想史に対する新たな視座を示して頂いた。以下は報告者（李）による講演の概要と感想である。

現在の近代ユダヤ思想史では、ハスカラーはエソテリシズムに反対する考え方として、世俗的・理性主義的な運動と捉えられるが、実際には宗教的でありむしろロマン主義の性格が強い運動といえる。19世紀前半の東欧におけるハスカラーがハシディズムを迷信的・異端的と見做し、それへの反動として発展していったことは確かである。しかし宗教的言説を否定していたわけではなく、さらに現在迷信とされる現象と親和性の高いものであった。

その一例がマスキリームによるメスメリズムに関する言説である。19世紀前半、ユステイヌス・ケルネルらによってメスメリズムによるヴィジョンの報告が多くなされたが、イツハク・ベン・レヴィンソンをはじめとするマスキリーム（ユダヤ啓蒙主義者たち）は、ヴィジョンを実際に起きているものとみなしただけでなく、メスメリズムを真のカバラーを知るための「科学的」手法ととらえた。レヴィンソンによれば、真のカバラーは哲学的であり「理性的」、すなわち一般的な認識に沿うような知恵であったが、『ゾーハル』が出版されて以降神秘主義へと変化し、全く異なるものになってしまった。東欧で大きな運動に発展していたハシディズムにおけるエソテリックなカバラーはこうした間違ったカバラーの流れを継ぐものと位置付けられ、これに対抗する形で「科学的」手法を用いたカバラーの獲得が目指されたのである。

ただし、当時西欧社会で報告された多くのヴィジョンはキリスト教的象徴を含んでおり、レヴィンソンらマスキリームはこれを誤ったヴィジョンとみなした。彼らにとって正しいヴィジョンとは、タルムードやミドラシュの伝説や寓話、カバラーのモチーフなど、ユダヤ社会における伝統的シンボルで構成されたものであった。この点において、レヴィンソンの考え方は文化的ロマン主義の性格を持つものであったといえる。

本講演はユダヤ教における啓蒙主義をテーマとしているが、指摘された問題点はユダヤ

思想に限らず宗教の「世俗化」論にも発展可能な問題である。メーデル氏は本講演のポイントの一つに **Boundaries of Religion** をあげていたが、我々が通常、世俗化として考える理性主義はあくまで当時の人々の思想的基盤におけるものであり、それは現在我々が宗教的と見做すものを大いに含んでいる可能性があることに気づかされた。

また、メーデル氏は質疑応答の中で、通説でハスカラー運動と呼ばれているものに対する重要な指摘も示した。現在、ハスカラー運動は18世紀ドイツのメンデルスゾーンに発するものとされているが、彼らにはマスキリームという自覚はなく、一方でマスキリームを自称する人々が現れるのはそれより後、19世紀前半の東欧である。氏によれば通説は、マスキリームたちの言説の中に西欧近代的な表現が見られる故に西欧地域の影響を前提し、時代と地域の離れた2つの現象をつなげてしまっているが、ハスカラー運動はこれまで見てきたようにロマン主義的でありメンデルスゾーンの思想とは異なるものである。報告者にはこの根底に、西欧近代的思想＝啓蒙的・合理主義的という前提が潜んでいるように見え、ここに括られる諸思想に対して前提を捨てて向き合う必要性を痛感した。

文責：志田雅宏、李美奈